

## 学会発表の時の OHP の使用法について

最近、気象学会では春秋とも、プレゼンテーションの手段として OHP が標準的とも思えるほど多用されるようになった。OHP は、製作時間が短いこと、プレゼンテーションの方法が多様なこと（例えば、発表中にシート上のキーワードにアンダーラインを書き込んだり、図中の特定の点に矢印を付けたりして聴衆の注意を引くとか、2枚のシートを重ねて図を比べやすくするとか）などの利点があり、今後ますます利用されることが考えられる。

ところが、その利用方法、特に発表会場での利用方法が必ずしも適切でない場合がしばしば見受けられ、聴衆からスクリーンが見にくく、発表者が損をしている場合があるようである。筆者のいままでの体験に照らし、聴衆にとってより聴きやすい発表会にするための二三の提案をしたい。この提案は、会場が比較的小さく収容能力が100人以下程度で、講演者と聴衆とがほぼ同一平面内にいるような会場を対象にしている。

### 1. OHP デッキ上のシートの置き方について

1) 示したい図や式は、スクリーンのできるだけ上部を使用するようにシートを置くこと。これをスクリーンの中央になるように置く講演者が多いが、聴衆からみた場合、前の席の聴衆の頭が邪魔になって見づらくなる座席数が増える。

古い型の OHP では、その様にシートを置けない構造のものもある。そんな型のデッキに当たるかも知れないのだから、シートを作るときから注意をしておくといよい。

2) シート上の水平線をデッキの前後の縁に合わせるのではなく、スクリーンの縁に合わせること。デッキとスクリーンが、平行に置かれていない場合があるからである。このことは、会場設営者側のちょっとした気遣いで解決できる問題でもある。

3) デッキ上のシートを神経質に動かす講演者がいるが、論外である。

4) 「まとめ」あるいは自分の言いたいことのポイントを書いたシートは、講演終了後も、質問を待つ間はそ

のまま示しておく方が聴衆に対して親切であるし、そうすることによって、役に立つコメントを引き出せる機会も増えるだろう。

### 2. 講演者の立つ位置について

1) デッキのそばに立つと、聴衆がスクリーンを見る視線を妨げる。部屋の構造、聴衆の座る位置によっては講演者の体によって、スクリーンの有効面積の1/3あるいはそれ以上も聴衆からは見えなくなることを知るべきである。

2) 従って、講演者はデッキのそばでなくスクリーンのそば（スクリーンと同一平面内にできるだけ近い場所）に立って指示棒を使用して講演するのがよい。講演はシートを指しながらでなく、スクリーンを指しながら行うのである。

3) こうすれば、1. の1)~3)の問題とか、講演者の影がスクリーン上にあるのに気付かず平気で講演を進めているとか言うことも、講演者が少し注意することによってなくなる。

以上の提案には基本的な欠陥がある。それは本文の初めに( ) 内に書いた OHP の持つ利点を引き出すのに不便になるからである。しかし、初めに注釈したように100人以下程度の会場であれば、デッキとスクリーン間の距離も小さく、その間を往復してもそんなに時間の損失にはならない。その様に考えると、多少の不便さはあってもスクリーンのそばに立った方が、聴衆はスクリーンを良く見ることができ、従って聴衆は講演者の主張をより良く理解できるに違いない。

一方、講演者が舞台の上へ上がるような大会場、例えば気象庁の講堂の様なときには、講演者がデッキのそばに立っても、スクリーンの位置とデッキと聴衆との相対位置から考え、講演者が聴衆のスクリーン注視を妨げる座席はずっと少なくなるであろう。

以上、限られた短い時間中に、能率よく講演者の意図を聴衆に理解して貰うのに役立つは幸いである。

(岡山大・教育 佐橋 謙)